

## ビバハウス便りNO. 79 11年ぶり～ビバとラミと二人だけの生活

ビバハウス 責任者 安達俊子

まさに突然、11年間で吹き飛んで、ビバを始める前の二人だけの生活に戻った。この突然の異変に一番びっくりしたのは、猫のラミちゃん、これまでのように自分の好きな部屋にいて可愛がってもらっていたのに、どの部屋に言っても誰もいない、ただがらんとして寒いだけ。当初2、3日はどうしてよいのか分からず、ビバハウス中を当てもなくさまよっていた。ビックリしたのは、愛犬ビバも同様で、これまでのように毎日みんなに頭をなでてもらって来たのに、誰もいない。一体どうなってしまったらうとの困惑の表情がありありとうかがえる。

もちろん本当は、ラミちゃんよりもビバよりも私たちの方が、この突然の変動を受け入れるのには戸惑った。2000年9月1日から、2011年11月15日まで、およそ11年2ヶ月、ほぼ全期間を私たちは若者たちと生活を共にしてきたのだから。11月16日いつものように朝起きて、今日は誰が一番先に食堂に来て、誰が寝坊して起きてこれないかと自然に考えてしまっていた。だが誰も起きてこないし、いつまでたっても物音ひとつしない。それでやっと、ああ今日からは若者たちはみんな入舟に行ってしまったのだと気が付く始末。本当に習慣、慣れっこというものは恐ろしい。

ところが実は、今回のこの大変動は、私たちが提案して実現されたものでもある。現在ビバハウスのメンバーは、病気などで自宅待機をしているもの2名、謹慎処分実施中のもの1名（七飯・石井農園）、12月末の銀座ミレー画廊での共同展覧会への作品制作のためビバを出て拘束のない札幌のアパートで生活しているもの1名など、在籍者のかなりのものがビバにはいない。一方入舟のほうは、入舟での最後の基金訓練生第3期コースが終了したために、現在は、すでに職場に通う者、継続して就活に励んでいる者のみで、両方を合わせると入舟宿舍の2つの建物にほぼぴったり収まる数になった。

同時に基金訓練に代わる新しい制度『求職者支援制度』を来年1月から実施を目指したが、種々の事情で今回は3月末までは見送らざるを得なくなった。もちろん経費、特に暖房の電気代（危険防止のためビバハウスでは全室電気暖房にしている）節減も大きな理由だが、少人数のスタッフの超過重負担軽減の目的もある。ビバハウスではこれまで、尚男も臨時当直者に入っても3日に1回の当直をしなければならなかったほど過酷だった。

さて来年3月末までの期限付きではあるが、せつかく手に入ったこの時間をどの様に使ったらよいのかあれこれ思案中である。最近協力関係を結んだ町内の内田農園（バラ園）に毎日通って、憧れのバラの手入れをしたい夢も残念ながらまだ1日も果たされない。一方、夫は、大好きなビバと3度の散歩がゆったり出来るのでご満悦で、心の余裕か、こんな短歌(?)を見せてくれた 「わが足と愛犬ビバの足跡が交差す初雪の夜を歩めば」